

第百十五話 お粗末なシーレーン防衛！

日本の対米英蘭戦争の基本的戦略は、第一段作戦（南方要域奪取し長期持久態勢確立）により、蘭印等の油田を含む資源地帯を殆ど無傷で確保して、現地精製等が望めないの、確保した石油・資源は日本に輸送して、軍需・官需及び民需に供することであった。この為には、輸送力の確保とその輸送間の防護が必須の条件であった筈だが、極めてお粗末な態勢であった。

承知の通り、第一段の軍事作戦は極めて順調に進展したが、その後の南方資源の日本への環送はままならなかった。何が問題だったのだろうか？「ガソリンの一滴は血の一滴」とも云われた石油を例に見てみたい。

1 採らぬ狸の皮算用、画餅に帰した石油輸入

昭和16年11月に戦争の可否を議論する御前会議に提出された企画院の資料「帝国国策遂行要領」審議資料では南方作戦を遂行した場合、それまで貯めた石油備蓄は減っていくが、それを相殺して南方からの石油輸送が増大するため、米国からの石油供給がなくても戦争遂行は可能である。」となっていた。シミュレーション上では、南方からの石油輸送量は昭和17年→昭和19年に30万トンから450万トンに拡大することとなっていた。現実には、南方からの石油輸入は昭和18年にピークを迎えるが、その後、タンカーが次々に沈められ、昭和19年には前年比80%減、昭和20年にはほぼ途絶えてしまう。

2 シーレーン防衛に関する海軍等の考え方

海上交通路の防衛或いは破壊は海軍の主任務である筈だが、当時の日本海軍にはそれを果せる程の戦力も無ければ、そのような用兵思想もなかった。と云えば、言い過ぎなのだろうが、“第一線兵力による制海・制空によって確保を期す、直接護衛兵力としては防備兵力の一部等をもって云々”と云うものであった。シーレーンの南方要域までの拡大によって、近海等を除き連合艦隊が担当することとなった。

日本海軍は、日米開戦後の1942(S17)4月に、第一海上護衛隊（東南アジア～内地間）、第二海上護衛隊（南洋諸島～内地間）を発足させ、その後も、軍令部内に海上護衛保護計画をも所掌する課が設けられ、1943(S18)年11月には海上護衛総司令部が設置され、第三、第四護衛隊も創設されたが、その実態たるや、質・量共にお粗末だった。

3 米軍の通商破壊作戦

米軍は、特に戦争後半において、日本に対し通商破壊作戦を行った。その主力は、豪州やハワイを基地とした潜水艦である。潜水艦3隻を一組とし、ウルフパックと名付け太平洋をはじめ、南シナ海、東シナ海、さらには日本海で作戦を行った。また、1944年には空母機動部隊の艦載機も南シナ海で作戦行動を行い、多数の商船を撃沈した。



末期には「飢餓作戦」と命名された大規模な機雷投下作戦を、日本本土周辺で行った。ボーイング B-29 爆撃機が、日本や朝鮮半島の港湾に機雷を投下し、艦船の運航を妨げた。ピーク時には潜水艦などの戦果を上回り、日本商船の月間喪失原因の過半数を占めた。

4 問題点は？

陸軍は早くから海上交通護衛を要望していたが、聞き入れられなかった。海軍は短期決戦により勝利すれば海上護衛の為に戦力を割く必要なしとの基本的な用兵思想があった。また、米潜水艦の能力を見誤ったのかも知れぬ。日本の戦争指導構想と実際の軍の作戦運用が余りにも乖離していたとも云える。独善的過ぎた連合艦隊！

* 作戦開始時点で、日本の基本構想が破綻していたのだ、何ということだ。

(第百十五話 了)